

聖女ですが悪魔を
召喚したので
誤魔化します!

こいなだ陽日

YOUKA KOINADA



ノーチェ文庫

CHARACTER

ゼブ

イサミナの村の長。
孤児の彼女を何とか
気にかけてくれている。

ノア

ある村の村長代理の青年。
イサミナたちに助けを
求めてきた。

キーレ

フィグネリアの天使。
ヴァーミリオン^①の正体に
感づいている様子で……？

フィグネリア

隣村の聖女。
イサミナが聖女仲間になり
喜ぶ優しい女性。

ヴァーミリオン

高位の美しい悪魔。
イサミナの聡明さを
面白がり、彼女の策に
付き合っている。

イサミナ

貧しい村に住む娘。
ある日突然、聖女となり
ヴァーミリオン^①を召喚した。
頭の回転が速く、
策略の類が巧み。

目次

聖女ですが悪魔を召喚したので誤魔化します！

7

書き下ろし番外編

聖女と悪魔の背徳的な情交

357

聖女ですが悪魔を召喚したので誤魔化します！

第一章 その聖女は悪魔を召喚する

広い海原の片隅に小さな島国があった。四季が存在するが、夏の暑さも冬の寒さも過酷ではないから住みやすく、国民の生活は比較的穏やかなものである。

宗教国家であり、国の中心部に建てられた豪華な教会には、毎日多くの民が祈りを捧げに来ていた。信じられている宗教は多神教で、神様は天界だけでなく、人間が住む地上の至るところにいるとされている。

そして、神様の力を授かった特別な存在を「聖女」と呼んだ。

——聖女は天使を召喚して平和をもたらす。

それは、この国の民なら誰もが知る教えである。



「イサミナ、助けてくれ」

その弱々しい声が耳に届いたのは、イサミナが井戸へ水を汲みに行く途中のことだった。明けきらぬ空はくすんだ藍色で、今にも消えそうな星が微かに瞬いている。

イサミナの村は貧しく、井戸がひとつしかなかった。そのせいでどうしても朝は混むので、早起きして誰もいない時間に水を汲むのを習慣にしていたから、こうして誰かに声をかけられるなんて珍しい。

空の桶を持ったまま振り向くと、薄暗闇の中に男が立っていた。目をこらして見たところ、彼が大きな街へ出稼ぎに行っていた男だと気付く。

「久しぶり！ 帰ってきたのね」

彼は今年、この村の娘と結婚したばかりである。子供ができたら色々入り用になるから……と出稼ぎに行っていたため、ここ最近の姿を見かけなかった。ようやく帰ってきたようだが、久しぶりにお嫁さんと会えるというのに彼の顔は浮かない。

そもそも「助けてくれ」と言うからには、なにか問題が発生したのだろう。

「なにかあったの？」

まだ周囲は寝静まっている時間なので、声を抑えてイサミナが訊ねる。

「実は、嫁さんへのお土産にこれを買ってきたんだけど……」

そう言って、彼は後ろ手に隠していたものを差し出した。視界に飛びこんできた鮮やかな紅にイサミナは目を丸くする。

「すごい！ これ、薔薇じゃない」

彼が持っていたのは薔薇の花束だった。この国では一部の地域でしか咲かないので、とても貴重で高価である。イサミナも薔薇の生花を見たことは片手で数えるほどしかない。

薔薇の芳香が鼻に届く。目でも鼻でも楽しめる素敵なお土産だと思うが、その薔薇の花びらはところどころ取れて、包んでいる紙の底に溜まっていた。

「もしかして……」

「そうなんだ。持ち帰ってくる途中にどんどん花びらが落ちてきて……。元気なのは真ん中の一輪だけだ。あとは、動かせば花びらが取れちゃう」

花束を見つめながら、彼が悔しそうに呟く。

「せっかく帰ってきたのはいいが、このまま渡すのはみつともないだろう？ 村にいたものの、こんなお土産じゃ家に入れないと途方に暮れていたところ、お前の姿が見えて……。イサミナ、これをどうにかできないか？ 頭のいいお前なら、元に戻せる方法を知っているんじゃないか？」

救いを求めるように、彼は懇願してきた。

——実はイサミナは村の中で一番頭の回転が速く、なにか問題が起きると、こうして頼られることがよくある。

しかし、取れてしまった花びらを戻す方法などさすがに存在しない。

「無理よ。私は神様じゃないもの、こうなってしまった花を元に戻すことはできないわ」期待を持たせないよう、イサミナははっきりと告げる。すると、彼はがくりと肩を落とした。

「そうか……そうだな。お前にだって無理だよな。嫁さんを喜ばせようと思ったのになあ……」

彼は悲しそうに眉根を寄せて、とほとほと歩き出す。

「困らせて悪かったな、イサミナ。……このまま嫁さんに渡すよ」

「待って！ 元には戻せないけど、お嫁さんを喜ばせる方法ならあるわよ」

イサミナは慌てて彼を引き留める。

「えっ？」

「花びらが散ったからこそ、とびっきりの贅沢があるのよ」

イサミナはにこりと微笑んだ。

結婚したばかりの彼とお嫁さんの仲がいいのは周知の事実だ。お嫁さんにしてみれば、出稼ぎですっと会えなかった旦那が帰ってくるだけでも嬉しいだろうし、たとえ花びらが散つていても、珍しい薔薇をお土産に渡されたら喜ぶだろう。

だからイサミナが提案するのは、お嫁さんではなく彼が満足する方法だ。お嫁さんが喜ぶことはわかりきっているので、求められているのは彼が納得のいく形でお嫁さんにお土産を渡す術である。

「花束を貸して」

「あ、ああ」

イサミナは棘が刺さらないように気をつけながら、花束から一輪だけ引き抜く。彼が言っていた唯一の元気な薔薇だ。

「まず、無事なこの薔薇だけを綺麗に包みましょう。花びらが太ぶりだから一輪でも十分見栄えがするわ。そして残りの花は温泉に浮かべるのよ」

「えっ?」

「薔薇風呂にするの。薔薇の花びらを使ったお風呂なんて贅沢すぎて、普通はできないわよ。お嫁さん、きつと喜ぶわ」

取れてしまった花びらを眺めて、イサミナが言う。

この村は貧しいものの温泉が湧いているので、男女別の共同浴場がある。朝風呂に入る村人は減多にいないので、朝の時間帯なら浴場を独り占めだ。

薔薇風呂にするなら、暗い夜よりも明るい時間帯のほうが絶対にいい。明け方のまばゆい光がきらきらと水面を照らし、その上に薔薇の花びらが浮かんでいたら、どれほど綺麗だろうか? この貧しい村ではなかなか目にすることができない、素敵な光景になること間違いなしである。

もっとも、薔薇の花びらを集めてポプリにしたり、押し花にしたりする方法もあった。しかし、彼はわざわざ生花を選んで買ってきたのだ。薔薇を扱っているお店なら、ポプリも押し花も売っていただろう。それでも彼がお土産として選ばなかったことを考え、生花だからこそその贅沢をイサミナは提案する。

「もうすぐ夜が明けるわね。浴場に薔薇を浮かべてきてあげるから、空が明るくなったからお嫁さんを起こして浴場に行くように伝えて。この元気な一輪は、私が綺麗に包んで脱衣所に置いておくわね。きつと、びっくりするわよ」

「……! わかった、ありがとうイサミナ!」

彼は軽い足取りで、自分の家へと戻っていく。その後ろ姿を見送ってから、イサミナは準備にとりかかった。

「ありがとう！　ありがとう、イサミナ！　嫁さん、喜んでたよ！」

質素な朝食を食べ終えると、出稼ぎから戻ってきた男がイサミナの家まで礼を言いにやってきた。その表情は明け方に出会ったときと打って変わって、生き生きとしている。

「どうやら、イサミナの家は彼を満足させたようだ。」

「嫁さん、あんなの初めてだって……！　すごく綺麗で、一生忘れないって言ってた」

「よかったわ」

イサミナは微笑んだ。

男という生き物は女の「初めて」に価値を見出す。お嫁さんが何気なく口にした「初めて」という言葉は、さぞかし彼の自尊心をくすぐったことだろう。新婚夫婦を喜ばせられたイサミナは嬉しくなる。

「俺のせいで、朝は水を汲めなかっただろう？　俺が代わりに並んで汲んできたから」

「ありがとう。あとで汲みに行こうと思っていたから助かるわ」

朝は薔薇風呂の準備をしたり、一輪だけ包み直したりと忙しく、いざ水を汲みに行こうとしたときには井戸に人が並んでいた。温泉水も飲めるけれど、いかにせん熱い。冷たい水が湧き出る唯一の井戸は貴重で、朝はどうしても長蛇の列ができる。

とりあえず諦めたが、やはり朝は冷たい水を飲みたいので、これはありがたい。

「あと、これは嫁さんと俺からお裾分け。他のみんなには内緒な」

イサミナは包み紙を渡される。その中身は都会でしか買えない柔らかい干し肉だった。村で干し肉を作ると、硬い上に味が濃くなってしまふ。だから、優しい味付けの柔らかい干し肉はとても貴重だ。分けてもらえたイサミナは喜ぶ。

「ありがとう！」

「こちらこそ、ありがとう。じゃあな！」

彼はそう言って帰っていく。

その後、ちょうど今日はイサミナが浴場の清掃当番だったので、薔薇風呂の後片付けを終えると、声が聞こえてきた。

「聖女様だ！」

「聖女様がいらしたぞ！」

家の中にいた者は外に出て、畑を耕していた村人は一斉に農具を置く。皆、村の中心にある広場に集まった。もちろんイサミナも広場へと向かう。

人の群れに加わって待つこと少し、ひとりの娘が村人の前にやってきた。彼女はイサミナと同じくらいの年だ。彼女が一步足を進めるたびに、ふわふわの茶色い髪が風にな

びく。

そんな彼女の後ろを、長くまっすぐな水色の髪をした男がついていった。抜きん出た美貌の持ち主で、その端整な顔は女性はもちろんのこと、男性さえ魅了すると言っても過言ではない。

人間離れた容姿——そう、彼は人間ではない。背中には、白い翼が生えて^はいる。彼こそが天使であり、天使を連れている娘が聖女だ。

「聖女様、今日もありがとうございます」

村長のゼブが代表して聖女に挨拶^{あいさつ}をする。それに併せて、村人全員が彼女に頭を下げた。「いえいえ、このくらい構いませんよ。それでは、始めますね」

聖女は微笑み、手にしていた聖書を開いて朗読を始める。村人たちは手を組みながら、そのありがたい言葉に耳を傾けた。

このように、週に一度、隣の村に住む聖女がやってきて聖書の朗読をしてくれる。

一回につき数分の朗読。分厚い聖書は一年かけて読まれ、年が明ければまた最初の項目に戻った。

毎年繰り返されるとはいえ、聖書のそれぞれの項目は一年に一度だけしか読まれない。聖書は聖女しか持つことを許されず、村人たちは幾度も聞かされたその内容に「聞き覚えがある」と思っても、細部まで覚えてはいないので、真剣に聞き入っていた。

今日朗読される内容は悪魔についてである。聖女の鈴のような可愛らしい声が響き渡った。

「悪魔は神や天使と敵対する存在であり、すなわち神を信仰する我々にとっても敵である」

（通常、悪魔は魔界に住んでいる。なんらかの方法で地上に現れると、殺戮^{さつり}を楽しんだり、人間を惑わしたりして不幸をもたらす。故に、悪魔は発見次第、排除しなくてはならない——ってね）

聖女が読むより先に、イサミナは心の中で次の文を読む。それと一字一句違^{ちが}えず、聖女が同じ文章を朗読した。

実はイサミナは聖書の内容を全て記憶している。このくらい、彼女には簡単なことだ。だから、聖女によるありがたい聖書朗読の時間はイサミナにとって暇な時間でもあった。祈るふりをして俯^{うつむ}くと、サラリと流れてきた桃色の髪が視界に入ってくる。

十八歳になったばかりのイサミナは、この国では珍しい桃色の髪をしていた。肩より少し下で切りそろえた髪は、自分でも気に入っている。

村人たちに頼られるほどの頭よき、聞いただけで聖書を全文覚えられ^るほどの記憶

力、そして一風変わった桃色の髪。それをもってしてもイサミナはただの村娘であり、目の前にいる特別な存在——そう、神様に選ばれた聖女の足下にも及ばない、ちっぽけな存在だった。

美しい顔をした水色の髪の天使も、ただの村娘であるイサミナのほうなど見向きもしない。彼は愛おしそうに聖女だけを見つめている。

（私も聖女になれたら、もっとみんなの役に立てて、この村の暮らしも楽になるのに……）そんなことを考えているうちに聖書の朗読が終わり、暇な時間から解放された。朗読の時間は苦痛だが、それでも週に一度の聖女の来訪は嬉しい。

「今週の施しは村の入り口に置いてあります。それでは、また来週にお会いしましょう」聖女は優雅に礼をして、天使とともに村を出ていく。

彼女の背中が見えなくなるまで見送ったあと、村人たちはそわそわしながら入り口に置かれた木箱を開けた。そこには野菜が山盛りに入っていたが、どれも傷んでゐる。

「チッ、なんだこれ」

誰かの舌打ちが響く。木箱の中を覗いた村人たちは次々に肩を落とした。

落胆する大人たちと木箱を見比べて、無邪気な子供が声を上げる。

「ねーねー。聖女様はケチなの？」

「しっ！ 聖女様の悪口なんて言うてはいけないよ！」

「そうだぞ、坊主。そもそも、聖女様はこの施しの中身までは知らない。実際に用意するのは隣村の村長だ。ケチなのはそいつだよ」

「聖女補助金を沢山国からもらってるくせに、隣の村の村長は本当にろくでなしだ」

木箱の中身が大したことないとわかると、男たちは畑仕事に戻っていく。傷んでいても貴重な食料なので、女たちは木箱から野菜を取り出し、手分けして運び始めた。

「すぐに傷んでゐる部分を切り落としましょう」

「そうね、結構食べられる部分があるわよ」

気分を落とさないように明るく言葉をかけ合う。

先ほど無邪気な質問をした子供が野菜を運ぶのを手伝いながら、再び疑問を口にした。「ねえねえ、聖女ってなんなの？ どうしてうちの村には聖女がいないの？」

「どうやら、聖女やこの国の仕組みに興味が出てきたらしい。大人たちが彼に優しく教える。」

「聖女っていうのは、神様の力を授かった特別な存在なの。聖女は天界から天使を召喚することができて、その天使は不思議な力で私たちにできないことを手伝ってくれるのよ」

「作物を育てるのには水が必要でしょう？　ずっと雨が降らないと田畑が乾いて作物が枯れてしまうから、そういうときは雨を降らせてくれるの。あとは、天使様は空が飛べるから、崖に橋を架けるのも手伝ってくださるのよ。この国が発展してきたのは天使様のおかげだわ」

「すごい！　天使って雨を降らせることができるんだ！」

子供が目を輝かせる。天使には翼があるので、空を飛べることは予想がついていたようだが、天気を操れることまでは知らなかったようだ。

天使は雨を降らせるだけではなく、雨期に川が氾濫しそうになれば雨をやませてくれる。大雪で雪崩が起きそうならば、雪そのものを消すことすら可能だ。よって、この国では自然災害はとてもし少ない。

「さつき聖女様と一緒にいらつしゃった、あの水色の髪をしていた方が天使様なのよ。……本当、いつ見てもお美しいわよねえ」

天使の美貌を思い出し、女性たちはうつとりとため息をこぼす。

「ええと……確か、隣の村はお金持ちなんだよね？　それってつまり、天使がお金を作ってくれるの？」

「違うわよ、天使は人間の手助けをしてくれるだけ。隣の村がお金持ちなのは、聖女様

がいるおかげなの」

「聖女がいる村は国から聖女補助金といって、沢山のお金をもらえるのよ。だから、隣の村は裕福なの」

この国において、聖女と天使は神様に次ぐ信仰の対象だ。聖女と天使が住む場所の環境を整えるために、聖女がいる村には国から補助金が支給される。聖女がいる村なら、どんな辺境にあるうと綺麗に整備されて豊かだった。

「この村にも聖女がいればねえ……。こんな惨めな施しを受けずに済むのに」

誰かが呟いたその言葉に、皆が頷く。

イサミナの村はとても貧しい。

よって週に一度、聖女が聖書を朗読しに来る際に隣村から施しを受けていた。聖女補助金をもらっている村は、近隣に貧しい村があれば施しを与えることが法律で決められているのだ。

施しは隣村の若い男たちが運んできて、聖女の来訪の際に村の入り口に置いていく。

隣村に聖女が誕生した数年前、初めてもらった施しには新鮮な肉と野菜に酒まで入っており、その晩は皆で宴をした。しかし、その施しの内容が徐々に貧相になっているのだ。まずは酒がなくなり、次に肉がなくなり、今では傷んだ野菜が入れられる始末である。

聖女補助金で隣の村は裕福になり、お金を手に入れた村長が欲深くなつたという噂が流れていた。しかも最近はその村を大きくするために、隣村を囲んでいる木を伐採する計画を立てているらしい。それにはかなりの資金が必要になるから、イサミナの村への施しを節約しているのだろう。

そういった事情もあり、聖女と天使のことは崇拝しているものの、隣村の村長の印象は悪かった。

「聖女って、どうやったらなれるの？ 僕でもなれる？」

聖女がいれば村が裕福になると理解した子供が明るく訊ねてくる。

「聖女は女の人しかなれないのよ」

「そうなのかあ……。それって、生まれつき決まってるの？」

「いいえ。ある日突然、神様から聖女に選ばれるという話よ。隣村の聖女も、五年前に聖女になったばかりなの」

「神様から力を授かると、手の甲に花の形の痣が浮かぶのよ。それが、聖女として選ばれた証というわけ」

ひとりの村娘が、己の手の甲を眺める。それにつられるように、他の女たちも自分の手の甲を確認し始めた。もちろん、そこに花の痣などない。それでも、この村に聖女が

現れれば暮らしが楽になると思うと、確かめずにはいられないのだ。

イサミナも何気なく自分の手の甲を見る。先ほど浴場の掃除をしている途中に見たときは痣などなかった。だから、なにもないと思っていたのだが――

「えっ」

イサミナは持っていたトマトを落とした。熟すぎたそれは、地面の上でぐちゃりと潰れる。

「ちよっと、どうしたのイサミナ」

「ま、待って！ こ、これ、これ……っ」

動揺しながら、手の甲を差し出した。それを見た女たちが驚いて目を睜る。

「ええっ!？」

「嘘っ、これ――」

――イサミナの右手には、聖女の証である花の痣が浮かんでいた。



イサミナが聖女になったという噂は、あつという間に村中を駆け巡った。帰りかけて

いた隣村の聖女を呼び戻して確認してもらう。

「おめでとうございます。これは、間違いなく聖女の証あかしです」

隣村の聖女のお墨付きをもらったことで、村人たちは歓喜に沸いた。ただちに寄合所へ村人が集まる。

「まさか、うちの村にも聖女が現れるなんて……！」

「よくやった、イサミナ！」

「神様はやっぱり見ていてくれたのよ。隣村からの施しに酷いを見かねて、この村にも聖女を使わしてくださったのね！」

国に聖女が現れたと申請すれば、審査のあと聖女補助金の支給が開始される。この貧しい村も豊かになっていくだろう。暮らしが楽になると、誰もが喜んでいる。

「国に申請する前に、本物の聖女である証明として天使を召喚しておくんだよね？」

誰かの呟きに皆が頷く。聖女に選ばれたら、まずは天使を召喚しなければならないのだ。「早く儀式をして、この村に天使様を喚よばないと！」

「イサミナ、頑張つて！ 隣村の天使に負けないくらい、素敵な天使を召喚してちょうだい！」

若い村娘に手を握りつつ励まされて、イサミナは苦笑する。

突然のことで、自身には聖女になった自覚などなかった。

だって、つい先ほどまで手に痣あざなんて浮かんでいなかったのだ。にわかに気持ちがついていかない。イサミナ本人より周囲の村人たちのほうが、この状況を喜んでいる。

「すぐにでも儀式をしたいが、なにを準備したらいいのかわからない」

村長のゼブが腕を組みながら小首を傾かげた。

「隣村の聖女様が、天使を召喚する儀式に必要なものと、儀式の手順を書いた手紙を送ってくださるそうです」

「そうか！ では、手紙が届き次第、できる限り早く儀式を執とり行おう。……イサミナよ」ゼブがイサミナの青い目を覗きこんでくる。

「お前のおかげで、この村は救われる。ありがとう」

「村長……！ 私こそ、村長のおかげで生きてこられたのよ。恩返しができるのは嬉うれしいわ」

実はイサミナの両親は十歳のときに亡くなっていた。ひとりでどうやって生きていこうと途方に暮れていたところに、村長のゼブが救いの手を差し伸べてくれたのだ。彼がなにかとイサミナのことを気にかけてくれたおかげで、なんとかひとりでもやっていくことができた。

イサミナにとつて、ゼブは親代わりであり、恩人でもある。だから聖女に選ばれたことよりも、聖女補助金で村長に恩返しできることを嬉しく思っていた。

未だに実感は湧かない。それでも、儀式を行い、天使を召喚すれば聖女としての自覚が出てくるだろう。

（一体、どんな天使様が来てくださるのかしら？）

天使は皆美しい姿をしているらしい。隣村の聖女が召喚した天使もかなりの美貌だから、まだ見ぬ天使のことを想像しただけで、イサミナはどきどきしてしまうのだった。

——そして翌日、隣村の聖女から手紙が届いた。

「これで、うちの村が施しをする必要はなくなったな。毎週あの荷物を運んでくるのも大変だったんだ。感謝しろよ」

手紙を持ってきた隣村の男は、そんな憎まれ口を叩いていた。いつもなら憤慨するところだが、今日ばかりは村人たちも浮かれていますので聞き流す。皆で肩を寄せ合いながら手紙を見た。

手紙を覗きこんだイサミナは、書かれていた内容にほっとする。

「お供えものさえ準備できれば、儀式自体は簡単なのね」

人ならざる天使を召喚するのだから、どれだけ大変な儀式が必要になるのかと心配していたけれど、儀式の内容は神への供物を並べて召喚の呪文を唱えるという簡単なものだった。

村人たちも儀式の内容に安堵している。

「とりあえず、神様へのお供えものを準備しないと！」

「ええと、まずは馬。……馬っ？ おい、馬なんてうちの村にはいないぞ」

「茶色い牛がいるから、それでいいだろう」

「そうだな。四本足で、尻尾も耳もあって、馬と同じ茶色だし、牛で十分だ。よし、オレたちが牛を準備する」

そう言っ村の男たちが牛舎へと向かう。イサミナは思わずゼブの顔を見た。

「う、牛……？ 牛で大丈夫かしら……!？」

「馬を準備するのは難しいし、隣村から借りるにも、あとであの村長になにを要求されるかわからないからなあ……」

ゼブは眉根を寄せる。

「確かに隣村の村長はケチだし、うちの馬のおかげで天使様を召喚できたのだから、補助金をいくらか寄越せって言ってきそう……」

イサミナは牛舎に視線を向けた。早速、茶色い牛がゆつくりと連れ出されてくる。どこからどう見ても立派な牛だ。

「……うん、遠目に見れば馬に見えないこともないかも……。……ほぼ馬と言っているわね」

一抹の不安がよぎりつつも、イサミナは「あれは馬だ」と自分に言い聞かせる。気を取り直すように、他に必要なものを確認した。

「あとはトマトだって」

「それなら昨日イサミナが落としたやつがあるわね。聖女騒ぎで、あそこに落としたままになっているはずよ」

「もったいないから、それを使いましょう。私、取ってくるわ」

村娘が立ち上がり、トマトを落とした場所へと向かう。

「あの潰れたトマトを……?」

イサミナは再び不安になった。

昨日落としてしまったトマトは潰れて原形を留めていない。しかも、熟れすぎていて腐る一步手前だ。

「でも、トマトであることは変わらないわよね……。隣村の聖女様からの手紙でも、

トマトの状態は指定されていないし。潰れていても腐りかけていても、トマトはトマトよね、うん」

深く考えないことにしたイサミナは、次の項目を確認する。すると、「大きな赤い布」と書かれていた。

「大きな赤い布って、随分と曖昧な言い回しね。どのくらいの大きさかしら?」

「そもそも、赤い布なんて持つてる奴いるか?」

「赤の染料は高価だから、赤い服を持つてる奴だっとなかなかいないだろう」

赤い布の心当たりがなく、皆が顔を見合わせる。すると、養鶏をしている男が声を上げた。

「聖女誕生の祝いに、鶏を絞めて振る舞う予定だったんだ。使い古しのシーツを鶏の血で染めれば赤くなるんじゃないか?」

「えっ」

これにはさすがにイサミナも絶句する。一方、村人たちは歓声を上げた。

「そうだ、それでいい! お前、頭いいな!」

「シーツなら十分大きいだろう」

「よし、じゃあ早速捌いてくる!」

養鶏ようけいをしている男が立ち上がると、「手伝おう!」「シーツは私が提供するわ」と、数人がそのあとをついていく。

(血染めのシーツって……!?)

天使を召喚する神聖な儀式に血染めのシーツはどうかと思う。馬も牛だし、トマトも腐りかけて潰れているし、なんだかとてもない儀式になりつつある気がする。

ゼブも不安なのだろう、イサミナに弱々しい視線を向けてきた。

「イサミナ、大丈夫だと思うか?」

「き、きっと大丈夫よ! ……多分」

引きつった笑顔でイサミナは答える。

そんな調子で、その日の午後には全ての供物くもつが準備された。……もともと、それらの半分以上が首を傾かしげてしまうような内容だったのだが。

(こ、これ、本当に大丈夫かしら……?)

一抹いちまつの不安がよぎるものの、準備が整ったので広場に村人全員が集まる。

手紙に書いてあった通りに供物くもつを横一列に並べた。腐りかけのトマトと、シーツを染める鶏とりの血の臭いがつんと鼻をつく。モーと、牛の暢のんき気な鳴き声が響いた。

「では、イサミナよ。天使様を召喚してくれ」

村長のゼブに言われてイサミナは頷く。そして、手紙に書かれていた言葉を唱えた。

「神よ、私の手に印が現れました。神よ、私は聖女になりました。神よ、私は聖女として民たみのために尽くすことを誓います。神よ、供物くもつは全てここにあり。神よ、神よ、私に天からの使いを与えてください!」

イサミナは必死で祈る。

(天使様、どうかこの村を救ってください)

都会から遠く離れたこの村は貧しい。冬になると食べるものにも困る始末だ。まだ死人は出ていないけれど、今のままの暮らしが続けば、そう遠くないうちに生きる力の弱い者から冬を越せず力尽きてしまうだろう。

この村にとって、聖女補助金は絶対に必要なものだ。

(ちゃんとした供物くもつを用意できなかったかもしれない。でも、一応あれは馬のつもりで、腐って潰れているけどトマトで、赤い布なのは変わりないんです! 私たちを、見捨てないで——!)

手をぐっと組んでイサミナは天を仰あおぐ。あの空の向こうにいるはずの、天使に向けて祈りを捧げた。その表情は今にも泣きそうである。

——すると、静寂の中で風が巻き起こった。周囲一帯がまばゆい光に包まれる。目

の前が真っ白になり、なにも見えない。

それでも、何者かが現れたのはわかった。人間ではない気配を確かに感じる。ようやく光が収まり、ぼんやりと何者かの姿が見えてきた。

「え……？」

イサミナは目を瞠^{みは}った。

ゼブも村人も、皆が言葉を失っている。

そこに、ひとりの男が立っていた。漆黒^{しつく}の長い髪を頭の高い位置で縛り、身につけているのは毛皮の腰布だけ。逞^{たくま}しい胸筋は露^あわになっており、身長もかなりある。

そんな彼の背中には黒い翼が生^はえていた。

顔立ちは美しい。人を惹きつけるその瞳の色は——赤朱色^{ヴァーミリオン}。

誰もが黙りこんでしまった中、イサミナが彼に声をかけた。

「ええと……あなたが天使？ 随分変わった格好をしているのね？」

その問いかけに彼はあざ笑う。悪意^{にじ}が滲^{にじ}んだその笑みは、天使が浮かべるような表情にはとても見えなかった。

「おいおい、俺のどこが天使に見えるんだ。俺は悪魔だ」

「悪魔……？」

悪魔は白い翼を持つ天使とは異なり、黒い翼を持つとされている。目の前にいる男の翼の色は、誰が見ても立派な闇の色だ。

「な、なんですってー!？」

イサミナは思わず素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な悲鳴を上げた。天使を召喚するつもりだったのに、まさか悪魔を召喚してしまうとは。

呆然と立ち尽くすイサミナをよそに、村人たちは腰を抜かして地面に尻餅をつく。

「あ、悪魔……だと……」

「ひええ、助けてくれ!」

「天使様は？ なんで天使様が来ないんだ？」

逃げ出そうにも、悪魔を見た恐怖で足がすくんで誰も動けなかった。恐ろしさのあまり体を震わせている。いつも冷静なゼブも悪魔の姿に口をあぐりと開け、呆然と地面にへたりこんでいた。

震えずに立っていたのはイサミナだけである。

「どうして、天使じゃなく悪魔なんかが召喚されたんだ？」

「ちゃんと供物^{くもつ}を用意しなかったのがいけなかったのか……？」

村人たちのざわめきがイサミナの耳に届く。

(そうでしょうね！)

声には出さなかったものの、心の中で同意した。

(よくよく考えてみれば、馬と牛の区別がつかない天使なんて相当ヤバイわ。そりゃ悪魔が召喚されるはずよ……)

そんなイサミナの心の声が聞こえたかのように、悪魔が言った。

「あんな儀式で、お高くとまっている天使の奴が召喚に応じるわけないだろう。おかしい気配を感じて召喚に応じてみたが、なんだこの供物は！ 血まみれの布まであるじゃないか。これで天使を喚ぶなど、とんだ笑いのものだな！」

イサミナは内心で「ごもっともです！」と頷く。悪魔ながら彼の言うことは正論すぎて、ぐうの音も出ない。

蔑んだ目で供物を見る悪魔の姿に、村人たちが不安を口にした。

「悪魔なんか召喚して、この村はどうなるんだ……？」

「召喚された悪魔は、暴れ回るんじゃないかなかったか？ 悪魔に滅ぼされた村は沢山あるだろう？」

その村人の言う通り、人間界に現れた悪魔が人間を蹂躪し村を滅ぼすというのは、実際にあったこととしてイサミナも聞いている。



悪魔の召喚方法は一般的には知られていないが、どこかの地域に伝承として残っているらしい。密かに伝わったそれを知り、興味本位で試してしまう愚か者が数年にひとりはいるのだ。

天使が見守ってくれるこの国においては、自然災害よりも、数年に一度の悪魔による被害のほうが酷いと言える。

「悪魔が現れると、僧兵が派遣されてくるんだよな？ 僧兵に倒してもらえば……」

「でも、この村が悪魔を召喚したと知られたら、罰を与えられるかもしれないわ。間違つて召喚したとは、信じてもらえないかも」

「なんてこと……！」

悪魔を召喚した者は死罪だと法律で決まっている。今回の場合、召喚者はイサミナだが、村の皆で準備したので、連帯責任を問われる可能性も十分にあった。

村人たちの顔が絶望に染まる。その様子を見て、悪魔はあざ笑いながらイサミナに声をかけてきた。

「お前が俺の召喚者だな？ 俺たちはいわば運命共同体だ。気が向けば望みを叶えてやつてもいいぞ？ 代償は高くつくがな」

「……っ」

悪魔あくまの囁きに、冷たいものが背筋を走り抜けていく。呆ほうけていたゼブがイサミナに呼びかけた。

「イサミナ、甘言に惑わされるな！ 悪魔を信用してはならん！」

「村長……」

イサミナはゼブを見る。彼は震えつつも、イサミナを心配して必死に声を絞り出している。

「召喚された悪魔は、召喚者を殺せないと聞いたことがある。こうなったら、お前が助けを呼びに行け！ 僧兵を派遣してもらい、悪魔を倒すしかない」

「そうはさせるか。俺も無駄に殺されるつもりはない。助けを求めに行くというなら、まずはお前たちを皆殺しにしてやる」

悪魔が村人を一瞥いちべつする。その冷たい眼差まなざしに、とうとう子供が泣き出してしまった。

「やだよ、死にたくないよお」

「助けて！」

「うわあああああん」

ひとりが泣き出すと、それは周囲の子供にも伝染していく。大人までもがすすり泣き、「どうか子供だけでも助けてください」と涙ながらに訴える声が聞こえてくる。

「……っ」

泣く子供たちと、恐怖に震える村人たち。イサミナの耳に届くのは阿鼻叫喚あびきょうかんの声。助けてという眩くらきに背中を押される。

ゼブが言った通り、悪魔は自分を召喚した者を殺せないと聞いたことがあった。だから、この状況で命の危険なく彼と交渉できるのはイサミナだけだ。

（私が、どうにかするしかない！）

「っ、んんっ」

イサミナは咳払いをする。

村人たちの運命は自分の手に委ゆだねられた。悪魔の気まぐれで、この村の人間の命は簡単に奪われてしまう。

それに、悪魔を召喚したことが国に伝わり、僧兵が派遣されたとしても、村人が助かるかどうかは五分五分だ。僧兵が来ればこの村は戦場となり、それに巻きこまれて死ぬ者も少なくないだろう。おそらくは、逃げ足の遅い女、子供から命を落とすことになる。それがわかっているからこそ村人たちは震えているのだ。まだ死にたくない、怯える瞳が物語っている。

だからイサミナは覚悟を決めた。

村人たちの悲鳴はイサミナを混乱させるのではなく、かえって冷静にさせた。少しだけ瞑目めいもくして頭を回転させる。

——果たして、どのくらい時間が経っただろう。

それは一瞬だったのか、それとも数分だったのか。イサミナはある計画を脳裏に描く。

「みんな、聞いてちょうだい！」

声をかけると、視線が一気に集まった。

「私はみんなを捨てて助けを求めに行くことなんてできないし、もし僧兵が来てくれたとしても、この村は戦場となって私たちの命も危ないわ。それに助かったとしても、悪魔を召喚した責任を問われるかもしれない」

「どちらにしろ、俺たちは助からないじゃねえか！」

咎とがめるような声に、イサミナは答える。

「助かる方法がひとつだけあるわ！」

高らかに告げると、村人たちの顔に一筋の希望が浮かんできた。子供たちも泣きやむ。

「えっ……っ」

「イサミナ、どういうことだ？」

村人たちは期待をこめてイサミナを見ていた。悪魔も興味深そうな眼差しまなざしを向けて

くる。

大きく深呼吸をしてから皆に告げた。

「彼を天使ということにして、誤魔化すのよ！ 天使を召喚したとなれば、補助金だつてもらえるわ」

一拍置いたあと、村人たちから驚愕（きょうがく）の声が上がった。

「悪魔を天使だと言ひ張るのか？ そんなこと本当にできるのか？」

「やるしかないわ！ みんな命は惜しいし、なによりお金が欲しいでしょう!？」

「そうは言っても、その黒い翼は誤魔化しようがないだろう」

「なんとか誤魔化すしかないでしょう！ お金っ、欲しいでしょう？ 私には欲しいわ！」
お金（かね）が欲しいと高らかに宣言（せんげん）して、イサミナはぐっと拳（こぶし）を握りしめた。

「黒い翼、上等（みずか）じゃない！ わざと悪魔の姿をしていることにしましょう！ 悪魔の姿になることで自ら（みずか）を苦境（くるわ）に置き、さらなる高み（たかみ）を目指しているとか、なんでも理由をつければいいじゃない。それに……」

イサミナは悪魔を見る。冷たい相貌（さうめい）をしているものの、その容姿（ようさ）は人並（ひとびら）み外（ほか）れて美しい。
「みんな、この顔（かお）を見て！ こ・の・か・おっ！ 翼（よく）の色（いろ）はともかく、この顔（かお）のよさなら天使（てんし）だって言い張（は）れると思う！ 相手が女（おんな）だったらず（だま）騙（だま）せるわ」

イサミナの言葉に、「確かに顔（かお）がいい……」と若い女性（おんな）たちの眩（くら）きがちらほら聞こえてきた。

——そう、この悪魔（あくま）はとても顔（かお）がいいのだ。「天使（てんし）です」と言（い）われたら信（しん）じてしまいくらいに。

「おい……俺（おれ）が大人（おとな）しく天使（てんし）のふりをすると思うか？」

顔（かお）のよさを褒（ほ）められた悪魔（あくま）が、苦虫（くるむし）を噛（か）み潰（つぶ）したような表情（へいしやう）を浮かべる。

「悪魔（あくま）は人を騙（だま）したり、困（こま）らせたりするのが好き（すき）なんでしょう？ 今（いま）から私たちは国（くに）を欺（あやむ）き、聖女（せいじよ）補助金（ほすけきん）を……つまり、お金（かね）を騙（だま）し取るの。宗教（しやうきやう）国家（こくが）において、お偉（えい）いさん相手に悪魔（あくま）を天使（てんし）だと騙（だま）るなんて、まさに悪魔（あくま）の所業（しやうごふ）だと思（おも）わない？」

イサミナは堂々（どうどう）と言（い）い切（き）った。すると悪魔（あくま）が興味（きょうみ）深（ふか）そうな表情（へいしやう）を見（み）せる。

「ほう……？」

（乗（の）ってきた！）

イサミナは思（おも）わず微笑（えいごう）んだ。

「あなたも悪魔（あくま）ならこんな辺鄙（へんぴ）な村（むら）の民（たみ）ではなく、国（くに）について大きい存在（そんざい）を相手（あいて）にしないと！ そもそも、今まで地上（ちやうじやう）に現（あら）れた悪魔（あくま）は国（くに）の僧兵（そうへい）によって倒（たふ）されているの。悪魔（あくま）の敵（てき）とも言（い）える連中（れんちゆう）を騙（だま）してお金（かね）を巻（ま）き上げるなんて、悪魔（あくま）的（てき）にも楽（たの）しそうですね!？」

イサミナはいかにも余裕のある顔を意識する。

本当は心臓がはちきれそうだ。でも、悪巧みをする人間が不安そうにしてはいけない。そんな表情を見せたが最後、相手の興味を引くことはできないだろう。

笑みを浮かべながらも、胸はどくどくと早鐘を打っている。その音が相手に聞こえないのは幸運だった。

「こんな辺鄙な村を滅ぼしても楽しくなんかないわよ。それよりは国からお金を奪って、一緒に贅沢しちやいまいしょう?」

「なるほど。お前は悪魔を誑かすつもりか」

全てを見透かしていると言わんばかりの瞳で、彼はイサミナを見つめてくる。値踏みするような眼差しを受け、イサミナは彼を睨み返す。

どうやらこの悪魔は、イサミナの考えることなどお見通しの様子だ。それならそれで打つ手はある。

「あなた、笑ってるわよね。私の話を面白そうだと思ってるんじゃない?」
堂々とイサミナは言い返した。

「村ひとつ滅ぼすくらい、悪魔にとつては簡単でしょう? それよりは、この酔狂な茶番に付き合ってみたらどうかしら。いい暇潰しになると思うわ」

村人たちの命、自分の運命、その全てがかかっている重要なことを、イサミナはあえて「暇潰し」と言い捨てた。些細なことだと強調し、「その程度なら……」という気持ちを悪魔から引き出そうと思ったのだ。

「なるほど、暇潰しか。じゃあ、俺を楽しませてくれるのか?」

「もちろんよ。弱者を単純に力で蹂躪するなんて面白くないわ。地を這う蟻を踏み潰しても楽しくないでしょう? 人間を屈服させるなら、ここを使うべきよ」

イサミナは己の頭を指さす。

「人間がもつとも価値を見出すお金を、国を騙して巻き上げるの。体を使うんじゃない、頭を使った戦いよ。楽しいに決まってるじゃない」

「ふむ……悪くないな」

悪魔が呟く。

(よし! この悪魔、意外とちよろいかも!)

彼が知ったら激怒しそうなことを思いながら、イサミナは心の中で歓声を上げた。そんな中、ゼブが信じられないという顔で訊ねてくる。

「お、おい、イサミナ……。本当に、そんなことをするつもりか?」

すでに覚悟を決めていたイサミナは、まっすぐな瞳で頷く。

（今度はみんなを説得しないかね。悪魔よりは簡単なのは……）

イサミナはたったひとりで悪魔と村人の両方を説得しなければならぬ。皆を救うために、やるしかないのだ。

手を広げ、胸を張って村人たちに語りかける。

「悪魔を召喚したなんて知られたら、この村は終わってしまうわ。それに、もし恩情でみんな助かったとしても、悪魔を倒すときは僧兵にも多くの犠牲^{ぎせい}が出るって言うじゃない？ この村を出て僧兵になった人、沢山いるでしょう？ 悪魔討伐の際、その人たちは地理に詳しいから、間違いなくここに派遣されるわ」

この村は貧しいせいで出稼ぎに行く者が多い。その中でも腕に覚えのある若者は、高給取りである僧兵に志願する。僧兵になった息子の仕送りをもらっている家が多かった。イサミナがそのことを持ち出すと、自分の息子が僧兵である親たちが首をぶんぶん横に振る。

「俺の息子を死なせたくはない！」

「そうよ！ 数年前にあった悪魔討伐では、僧兵が百人くらいあっさり死んだっていうじゃない。私の子が助かる保証はないもの……。避けられる戦いなら避けたいわ」

自分の子を死なせたい親などいない。思惑通り、村人たちは僧兵の悪魔討伐に難色を

示す。

村人たちの顔色が変わったのを見て、イサミナは再び悪魔に向き直った。

「悪魔が存在するとわかると、国から僧兵が派遣されてくるの。特別な訓練を受けた兵士よ。今まで地上に現れた悪魔は全て倒されているわ。あなたもきつと、倒される」

その話は嘘ではない。それがわかっているのだろう、悪魔はイサミナの言葉にきちんと耳を傾けた。

「天使のふりをするのは、あなたにとっても悪い話ではないと思うの。もっとも、このまま大人しく魔界に帰ってくれるなら話は別だけど」

「いや、召喚された悪魔は、自分の意思では魔界に帰れない」

悪魔は腕を組む。

「確かに、人間界へ行って無事に帰ってきた悪魔の話は聞いたことがない。お前の言っている話は本当らしい。僧兵とやらがどれほど強いかわからないが、戦ったら俺は最終的に殺されるんだろうな」

「ええ、そうね」

イサミナが断言すると、悪魔はため息を吐く。

「どうせ殺されるなら、ひとりでも多くの人間を殺してやる——っていう血の気の多い

悪魔もいるが、俺は違う。むぎむぎ死ぬのはごめんだな。自ら望んで危険な目に遭うのはただの馬鹿だ」

「じゃあ……」

「お前の度胸に免じて、口車に乗ってやる。国を騙すっていうのも面白そうだしな」

「やった……!」

イサミナは拳を握りしめる。そして、村人を見回した。

「みんな、それでいいよね!」

問いかけると、すぐに答えが返ってきた。

「それでいいものにも、それしか方法がないなら……やるしかないだろ! 補助金も欲しいしな」

「そうよ! 悪魔さんとはとても美形だもの、天使だと思えば……うん、天使に見えてきたわ。それに、お金も欲しいわよね」

「悪魔も天使も人間じゃないことには変わらない。それに、この村が聖女補助金をもらえれば、暮らしがぐっと楽になる。金は欲しい!」

反対の声は上がらなかった。しかも、「お金が欲しい」という欲望が口をついている。腰を抜かしていたゼブも、とうとう立ち上がった。

「こうなったら、腹をくくろう。一蓮托生だ! 我々の聖女は、天使を召喚したんだ!」

村長の宣言に、村人たちは拍手した。

「天使万歳!」

「天使様っ!」

半ば、ヤケになったような声援が響く。

（な、なんとかなるかも……!? ありがとう神様……って、いやいやいや、感謝すべきは悪魔様?）

まだ課題は山積みだが、とりあえず光明が見えてきたとイサミナは思った。そんな彼女の耳元に悪魔が唇を寄せ、そっと囁いてくる。

「頭の回転が速い女は嫌いじゃない。他の奴らを口車に乗せる姿も気に入った。お前、一流の詐欺師になれそうだな? しばらくは付き合ってやるから感謝しろ」

「……ええ、ありがとう。ところで、あなたの名前は?」

名前がわからないと不便なので訊ねてみる。すると、彼は自分の目を指さしつつ言った。「ヴァーミリオン。この目の色だ」

血よりは鮮やかな、しかし夕焼けにしては濃い色の瞳——。まっすぐに見つめられて、イサミナは思わず見惚れそうになる。

「わ、私はイサミナよ。よろしく、ヴァーミリオン」
「ああ」

長い髪をなびかせながらヴァーミリオンは頷いた。そして、イサミナに再び囁きかけてくる。

「僧兵とやらにむぎむぎ殺されるのは嫌だが、退屈は嫌いだ。この村での暮らしに飽きて、僧兵と戦うほうが面白そうだと思ったなら村人を殺すぞ？　せいぜい、俺を楽しませてみろ」

「ひえ……っ」

悪魔らしい冷たい声色に、戦慄が体を駆け巡る。

御しやすいと安心したもの、やはり彼は悪魔であり、人を人とも思わない存在だ。彼の気分で、この村なんて簡単に滅ぼされてしまうだろう。

彼はイサミナの口車に乗せられたのではなく、あえて譲歩したのだ。イサミナの言う通り、「暇潰し」のためだけに。

しかし、悪魔を召喚してしまった以上、この村にとつての最善はこれしかない。悪魔を天使だと誤魔化し通すしかないのだ。もう後戻りできない。

(ええい、なるようになれ！)

イサミナはぐつと拳を握りしめる。

——そして、この日から村を挙げての壮絶な計画が始まった。



ヴァーミリオンは、ひとまずイサミナの家で一緒に暮らすことになった。両親が死んでからというもの、ずっとひとり暮らしだったので、彼が増えたところで特に狭いとも感じない。

「随分と古びた家だな。魔界にある俺の住処のほうが綺麗だぞ」

家の中を見回しながら、呆れた口調でヴァーミリオンが言う。

「この村は貧しいんだもの、しょうがないわ。でも、国に申請すれば聖女補助金がもらえるの。そのお金は天使様に立派な家を用意するお金でもあるから、うまく誤魔化せればいい家に住めるわよ」

「その金をもたらえるまで一体どのくらいかかるんだ？　こうしたほうが早い」

彼はさっと腕を振る。次の瞬間、古びていた家具が豪華なものに変わり、床にはふかふかの絨毯が敷かれていた。

悪魔の魔力を目にして、イサミナは驚く。

「す、すごい！ 魔力を使えばなんでも作れるの？」

「無から有は作れない。これは魔界にある俺のものを喚び寄せて交換しただけだ」

そう言いながらヴァーミリオンは毛足の長い絨毯に腰を下ろす。彼が胡座をかいた瞬間、イサミナは目を瞠った。

—— なにか、見てはいけないものが視界に入った気がする。

（あれは、まさか……！）

イサミナは気になって、ちらちらと何度も彼のほうを見てしまった。挙動不審になった彼女にヴァーミリオンが声をかける。

「おい、どうした？」

「……あなた、下着は穿いてる？」

「悪魔はそんなもの穿かない」

（やつぱりあれはご神木——……って、悪魔にご神木って表現は変だけど！）
彼の答えを聞いてイサミナは赤面する。

彼は毛皮の腰布を巻いただけの格好だ。その腰布の長さは膝上まで。そんな状態で胡座をかけば——そう、見てはいけないものが見えてしまうのも無理はない。

「お願いだから下着を穿いて！……というか、着替えましょう！——そもそも、毛皮の腰布姿だなんて天使に見えないわ。まずは見た目から変えないと！」

イサミナは隣村の天使の姿を思い出す。彼はいかにも天使らしい白のローブを着ていた。

「白……そう、白い服がいいわ。白ってなんだか天使っぽいもの。家具みたいに服も出せる？」

「残念だな。服は無理だ」

「どういう基準なの……？ まあいわ、父さんの服があつたはず」

父の死後も捨てきれず、形見として大切に取っておいた服を出すことにする。父は若い頃に大きな街で司教をしていたとかで、そのときに着ていた詰め襟の服があるのだ。

ヴァーミリオンは背が高いが、イサミナの父も長身だったので、おそらくサイズは大丈夫だろう。

「これに着替えて！」

「仕方ないな……。だが、下着はせめて新品を用意しろ」

「そうよね、他人の下着なんか嫌よね。わかったわ」

彼は服を受け取ると、イサミナの目の前で堂々と腰布を取ろうとする。イサミナは慌